

# 関西 ECOMAIL 第44号



# ECOMAIL 10

## 関西 ECOMAIL

関西支部会員のみなさまに、ワークショップのお知らせや環境教育に関わる情報の交換をしていただくために発行しています。また、学会員以外の方々に、環境教育に関心をもっておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションを広く図りたいと思っています。

日本環境教育学会会員のみなさまには支部会費、会員でない方には購読費として、年間1500円をいただきましたら、ワークショップの案内とこの関西 ECOMAIL を送らせていただきます。  
(通信費振り込み先: 日本環境教育学会 関西支部 郵便振替口座 00990-5-37886)

## 第66回 関西ワークショップのお知らせ

○テーマ: フィリピンの教育事情-環境教育への取り組み-

○日時: 1998年6月29日(土) 14:30~16:30 訂正です

○場所: 大阪教育大学天王寺キャンパス

本館1階南側第12教室 (予定、当日キャンパス内に掲示します)

(JR大阪環状線 寺田町駅下車、南出口を西へ徒歩3分)

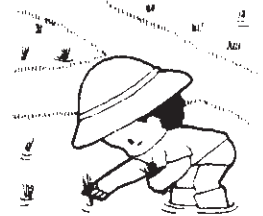
○話題提供: 秋吉博之氏 (加西市立北条中学校)

(秋吉氏は9月よりケニアのナイロビヘジャイカの国際協力として行かれますので、しばらくの間、会えなくなります。この機会に秋吉さんの環境教育観をじっくりお聞きしましょう)

なお、ワークショップ終了後世話人会を開催します。世話人の方はご予約ください。

## 第44号 目次

- 日本環境教育学会第9回大会(大阪)を終えて(鈴木善次) ... 2
- ・特別企画講演(B会場)を司会して(植田善太郎) ... 3
- ・津崎優子 詩のコーナー ... 3
- ・第65回 関西ワークショップ(3/14)報告
- 【日本を自然保護大国に】(森山まり子) ... 4~5
- ・報告「地球環境教育~参加・体験による教育効果~」  
(山口洋典) ... 6~7
- ・ネットワーク ... 8



今年度の会費を未納入の方に郵便振替用紙を同封しました。ワークショップに参加できない方はお手数ですが、氏名を記入して郵便局から入金ください。なお、95年度以前より会費を滞納されている方への発送は次回より一時停止させていただきます。

滞納分を入金されるまで請求が続きますのでご注意ください。

## 皆さん、お世話様でした

——日本環境教育学会第9回大会（大阪）を終えて——鈴木善次

5月24日午後5時少し前、シンポジウム閉会のあと、「お帰りはエスカレータは使えませんが、階段をお降り下さい」という僕の「くだらない」（エスカレータは昇るだけ）挨拶で大会は幕を閉じた。「ご苦労さん」と声をかけて下さる参加者。とてもうれしい。「よく来て下さった」と心で感謝。ともかく無事に終わってホッとする。後で、事務局の石川さんに聞いたところ500名を越える参加者があったという。発表件数も150件を越えていたし、ミニシンポ、ミニワーク、自由集会など多彩な内容であった。残念ながら本部に詰めていた僕はほとんど発表の内容を聞くことが出来なかった。せっかくカナダからお招きしたスナイブリーさんの記念講演も部分的だったし、シンポジウムについても同様であった。でも、今回はそれでよしとしよう。それよりも参加された皆さんに満足していただけたかどうかの方が心配である。一般講演の分科会の会場数が多すぎると言う感想も一部にはあった。ミニシンポなどの時間も足りなかったとも。二日間という期間で多様な計画をこなそうとすると無理が出る。次回からの大会の参考にさせていただこう。

ところで、昨年の横浜大会で次回は大阪で開くことを勝手に引き受けてきてしまった僕を支部長の赤尾さんをはじめ関西支部の皆さんが快く受け入れて下さったことに感謝の意を示したい。それから開かれた実行委員会でもいろいろご迷惑をおかけした。ときには「自己主張」も。おそらく、僕の大阪教育大学での最後の年を……というご配慮であろう。ともかく、皆さんの温かいご協力で当日を迎えることができた。気にしていた天気も味方してくれた。毎日や朝日などの新聞報道もあって非会員の方も百名を越える参加。環境教育への関心の高さを実感した。放映を目にすることは出来なかったが取材にこられていたNHKが二日目の夕方、ローカル・ニュースで大会の様相を流してくれたようである。環境庁の紹介で富山テレビも取材にこられた。環境教育についての番組を制作するためだという。大阪ではその結果をみることは出来ないが、富山の人々の環境保全意識と行動の高まりを期待しておこう。

休憩室でのハーブ・ティーのサービスも好評であった。実行委員の西村さんのお仲間、地元柏原市の人々によるものである。一部のハーブは実行委員の原田さんの提供。僕もハーブの香りにひとときの安らぎをうることが出来た。会場でのPRの効果もあったのだが、記念講演とシンポジウムの間の休憩時間にはその香りを求めて「長蛇」の列ができた。内緒だが、その休憩時間に実行委員の山田さんがご準備くださったお抹茶をスナイブリーさん、通訳の方とともに頂戴した。この場をお借りしてそれぞれにお礼を申し上げたい。

また、いちいちお名前はあげないが、前日からの準備を含めて大会の運営に関わって下さった実行委員の方々、お手伝い下さった学生の皆さん、本当にご苦労さまでした。中には発表を聞きたかったという方もおられたようであるが、申し訳なく思っている。

こうして終了した第9回大会であったが、第1回大会から振り返ってみると、この8年間の時代の変化の大きさを感じる。少なくとも環境教育への関心は高まりを見せている。しかし、環境は必ずしも改善されたとは言えない状況が続いている。ダイオキシンや環境ホルモンなど次々と新しい環境問題が生まれてくる。すべて現代科学文明が生み出す問題である。そうであるならば、環境教育もそうした根元的なものに視点をあてていく必要があるのではないか。

（第9回大会実行委員長）

## 特別企画講演（B会場）を司会して

植田善太郎（泉大津市立条東小学校）

第9回大会の「特別企画」のテーマは「現在の環境教育に欠けているもの」で、実行委員会でたくさんの方の議論を尽くした後に決定された。これは、来年度の10周年記念大会につながるような論議をこの大会から巻き起こしていこうとした、実行委員会の考えのもとに企画されたものである。表現はネガティブであるが、21世紀にむけた環境教育に期待されているものを引き出すことが目標である。企画者の予想に反して16件という多くの応募がありうれしい悲鳴で2会場で分科会、全員発表後A B合同で総合討論という形をとらせていただいた。B会場を司会した筆者は、A会場の講演は全く聞いていない。よって、ここではB会場のみを報告をさせていただきます。

司会をした筆者が、1番目に「環境教育における「総合的な学習」の限界と可能性」という題で発表した後、東京の田中敏久氏が「幼・小・中・高を通じたカリキュラム作り—子どもの発達段階と横断的・総合的視点—」という題で発表された。氏は筆者が指摘した教課審「中間まとめ」の限界に対して、「中間まとめ」をもっと全般にわたって環境教育的に読めるとの指摘があった。加えて、学会版の環境教育カリキュラムの開発の提案は筆者の提案とも相通じるものであった。続く、薫英女子短大の松永三緒氏の「小・中・高・大の学校教育の都市環境学習と市民参加の社会・生涯教育の学び合いの試み」は、摂津市での取り組みを紹介しつつ、地域から地球を見る視点の不十分点を指摘された。武蔵工業大学の小堀洋美氏は「大学における環境インターンシップ制度の実践に向けて」という題で米国の産学共同インターンシップの紹介をされたが、「欠けているもの」と意味ではあいまいな意見であったと思う。愛教大の寺本潔氏は「子ども参加による景観づくり環境学習の必要性」を提起され、子ども参加の町づくり機能が学校にあるはずだという氏の独特の論を展開された。続く2件は日本野鳥の会サントリアセンター／谷津干潟自然観察センター職員の石郷家卓哉氏と橋優子氏。「学校と社会教育施設の連携について」（副題は略）と「子どもの発達をふまえた社会教育施設の対応について」（副題は略）という題で学社（社会教育施設）連携の必要性とその成功例を紹介されたが、子どもの発達に合わせた施設の対応についての報告は特別企画の意図が明確でない内容であったように思われた。最後に北海道の三浦國彦氏は「いま環境教育が必要なのは親たちである—地域の自然を座標軸に家族で地球を見せる—」という題で講演された。氏が作詞作曲されたゴミの音頭を歌われての熱演に思わず爆笑が起こる講演であったが、自然体験を親たちとすることで人間の深層に潜む野生を磨く教育の必要性を訴えられた。

以上、B会場の発表の内容を少しでも分かっていたらこうと記録しましたが、参加した人にはまさに駄文だと思います。次号ではA会場の司会と総合討論のコーディネイトをされた福島古氏に登場願って特別企画の総括をしていただく予定にしていますので、請うご期待。

### 水玉朝顔（酸性雨）

今日のあさがおは  
ふしぎな 水玉もよう

今朝 すこし 雨が降ったんだね  
雨粒の数まで かぞえられるよ

何かが 進行している

眼に見えぬものを 垣間見せる  
あさがおの花びらのうすさ

まだらの顔で せいっぱい  
朝の輝かしさを うたっている

津崎優子詩集『水の色は地球の色』より

（津崎優子）は大会実行委員の西村さんのペンネームです。

津崎優子 詩のコーナー

今号より可能な限り掲載していきます。

わたしたちは、行動を開始した！

## 日本を自然保護大国に

自然保護大国でなければ、21世紀は生き残れない

日本熊森協会 会長 森山まり子

よる1998年3月14日、第65回日本環境教育学会関西ワークショップの会場で講演させていただきましたこと、お礼申し上げます。20名ほどの方がご出席くださり、最後まで熱心に耳を傾けてくださいました。ほんとうに、うれしかったです。この機会を作ってくださった秋吉博之先生に感謝します。

植物+動物=森

わたしが理科教師として、兵庫県尼崎市立武庫東中学校に勤めていた1992年の1月のことでした。中1の女生徒が持ってきた1枚の新聞記事は、わたしたちに衝撃を与えました。

### ツキノワグマ、人間の環境破壊により絶滅寸前

おとなたちの動きは、何ひとつありませんでした。生徒たちは胸が痛くなって、ついに自分たちでツキノワグマ保全団体を結成し、みんなで「クマ守れ」と立ち上がったのです。

生徒たちは町内を回って集めた署名を持って、県庁や環境庁に出向きました。クマの絶滅が止められそうにないことを知ると、前代未聞、兵庫県貝原知事に直訴して保全を訴えたのです。両陛下に手紙も書きました。その結果、ついに重い扉が一枚開き、1994年5月、当時の浜四津環境庁長官によって、「兵庫県ツキノワグマ狩猟禁止」が発表されました。

しかし、野生動物たちの生息地であった広葉樹の森は、スギ一辺倒の戦後の造林と開発により破壊されたままです。そのため狩猟は禁止されても、餓死寸前におちいった野生動物たちが食べ物を求めて人里に出て来ては有害獣にしたてあげられ、次々と射殺されていきます。

生徒たちは、クマの問題は森の問題であり、森の問題は人類をもふくめた全生物の生存を脅かす大変な問題であることに気づきました。大学生になったかれらは、「森を残し、全生物と共存しなければ人間も生き残れない」という理念に基づき、クマだけでなく全生物を保全するために、共鳴するおとなたちと日本熊森協会を結成したのです。他生物の命を尊重するという倫理面からも、また、次の1000年も人が住み続けられる自然環境を残すという環境保全面からも、欧米のような大自然保全団体を日本にも育てあげたいと、日本熊森協会は本気です。(完)

以上、第65回ワークショップの報告です。

たった1枚の新聞記事から中学生たちが自らの意思で立ち上がり、それぞれの生活を営まなければならない動物たちと人間たちの共存を目指して一生懸命運動するという森山先生のお話は、感動的でした。(先生御自身も、「本当に映画みたいだ。」とおっしゃってました。)  
「無関心で無気力だ」とか、最近では「すぐキレル」と言われがちな子どもたちについて、改めて考えさせられました。

以下は、その熊森協会のメンバー(現在20歳)がアメリカを訪れ、現地の自然保護運動との交流をはかった報告の新聞記事です。(田代)

熊森協会の3人  
大学生

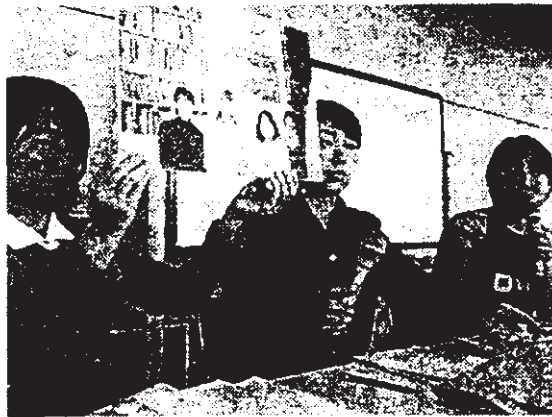
芦屋市で  
帰国報告

# 「活動の輪広げられる」

## 米の自然保護団体に学ぶ

「クマが住める森を残したい。でもどうすれば全国的な運動に広げられるだろう」。そんな問題に突き当たった「日本熊森協会」(本部・西宮市、森山まり子会長)の大学生三人が、アメリカの自然保護団体を訪ね歩き、二十八日、芦屋市業平町の市民会館で帰国報告をした。写真。

日本熊森協会は、国内のツキノワグマが減少していることにショックを受けた中学校理科教師の森山会長が、「クマが住めるような豊かな森を残そう」と、教え子らとともに昨年四月に結成した。会員約百四十人。美方郡美方町の森林でブナやクリなどの広葉樹を植える運動をしてい



動の先進地アメリカの団体に学ぼうと、アルバイトなどで費用をつくり、今月一日から八日間、サンフランシスコを訪問した。

現地では、四団体の会長らと交流。会員約二十五万人が海洋生物の保護に取り組んでいる「アース・アイルランド・インスティテュート」でネットワークづくりの重要性、イメーシキョクターの商品化やニュースレター作成の効果などを教わり、この活動を全国的に広げたいと考えていた森山さんの教え子の大学生、足立容子さん、瀬戸悠子さん、村岡麻衣子さん(いずれも二十歳)の三人は、自然保護運

日の集まりで報告した。  
「今回の訪問で、自分たちでも大きな活動の輪を広げられることがわかった」と三人。連絡は同協会(0798・71・3079)へ。

1998 3.29 (日)  
朝日 阪神版より

## 地域環境教育～参加・体験による教育効果～

山口 洋典（立命館大学・気候フォーラム）

1997年12月に京都にて開催された地球温暖化防止会議（COP3）の盛り上がりは、開催地京都でも自然におさまりつつある。果たして「COP3 熱」というものがあつたのかは疑問であるが、マスコミを中心に温暖化の議論が「加熱」していた時期は既に過去のものとなりつつあるのだ。

私はこれからの地球環境に対して決定的に重要なCOP3に対して、「市民の立場からCOP3を成功させる」という理念を掲げた組織「気候フォーラム」に事務局員として関わった。

COP3は国連の会議であり、正式名称を気候変動枠組条約第三回締約国会議と言った。1995年の第一回締約国会議から8回の準備会議と、10日間の会期を経て難産の末生まれたのが「議定書」と呼ばれる取り決めである。簡単に経緯を説明すると、1995年の第一回締約国会議にて「第三回締約国会議に気候変動／地球温暖化を防止するための取り決め」ということで「議定書」の策定が先送りされた。さらに第二回締約国会議の關係会議にて「削減」を謳った議定書締結を目標とすることで合意がなされたのである。

一連のCOP3に関して「政治の話であった」「官庁主導であった」などと批判する人が一部でいる。しかしこれは当たり前の話であるはずだ。役割分担から言っても 政策策定は官庁主導であることは間違いないし、各国代表団は政治の話をしに雪のない京都にやってきたのである。彼らは各国の立場がある。まさに政治の話たるゆえんであった。必要なものはバランス。間もなくお金で宇宙へ飛び立てる時代が来る。そうした時に個から全体へのつながり、人間と地球とのつながりを考えていなくては、「共存」は「虚像」になってしまう。別の言い方では国益から地球益を目指す必要がある、と言う人も同じ趣旨であろう。

とりあえずCOP3は様々なものの「きっかけ」になった。私はまだ学生という立場にいるため、話の視点を学生と教育機関へと移していくと、今回のCOP3に息づく京都は格好の学びの場であったと思う。私のように組織の事務局員として関わったケースは希有なものであるが、とりあえずボランティア活動に関わった学生は確実に使用前と使用后～ボランティアに関わった前と後～で知識も意識も大々的に変わった。私が気候フォーラムのボランティアを対象にとったアンケートでわかったのは、ボランティアの多くが活動に参加する前は「何かしたいけど」「何をしたいのかわからない」という思いを抱いていたということであった。彼らはボランティアを体験後、今後もボランティア活動ないし環境問題に関わっていきたく、皆がまるで口裏を合わせたかのように言っていたのである。学生の「自由」と大学教育の空洞化を「ボランティア活動」が埋めていったのである。ただ残念なのは、今回のCOP3では阪神・淡路大震災や日本海重油流出事故のように、積極的に独立したボランティア団体は活動しなかった。対象とする問題が当面の緊急性を求めるものでなかったためであると私は解釈しているのだが、やはり環境問題に関して危機感や緊急性を抱いて欲しいものである。

ともかく、社会の中で学ぶこと、まちの中で学ぶこと、市民活動を通して学ぶことの必要性・必然性は、学校で教える・教えられる「知」と「今」「ここ」の問題・問題群との間に埋めることができない「すきま」が存在することにある。このこと自体が学校教育の限界であると思うのだが、感性の教育であると言われる環境教育は、このようなボランティア活動などへの個の関わりとそこからの気づきによって育まれることを今回深く実感した。

社会は教育を変える。教育は社会を変える。私の専門は都市計画であるが、計画分野にも教育の視点を大いに入れていくことに疑問を持たなくなった。私はこれから大学のまち・京都の活性化のために学生がまちに出ていくこと、多様な市民活動に関わって学ぶというしくみづくりに関わっていくことに決めた。さしあ

たって具体的な事業に関わることになったのだが、その肩書きに「京都・大学センター非営利分野インターンシップアシスタントスタッフ」というものを与えられた。これは今後3年計画のプロジェクトであり、1998年度が初年度となる。私は「環境・まちづくり分野」の担当コーディネーターである。アメリカでは90%の学生が経験しているというインターンシップであるが、これに対するいい訳語がない。さしあたって参加・体験型学習、あるいは実地学習とも呼んでおく。

学生がまちに出ると、「普通」に大学に行くことに疑問を感じ、なかなか大学に帰ってこないのが通例である。私もその例外ではなかったが、「大学」と「まち」をつなげていくためにもインターンシップコーディネートを行いながら、時代と社会と文化が「わかる」学生、そしてそれによって「変わる」学生たちが1998年には多数京都から生まれるであろう。

「学生はまちに出よう！学校では学べないことが学べます。（注：まちに出たら学校に戻りましょう。一回はまったくきつと抜けられませんよ@経験者）」

ところで、COP3において地球益に立たなければならなかったのは外でもない、我々環境NGOであった。気候フォーラムには225の団体と368の個人が参加した。私は私見として気候フォーラムを次のように評価をする。

- 1) 気候フォーラムは「日本の」市民団体として現段階でできる限りの効果をもたらした。
- 2) 既に市民活動は要求陳情型ではなく合意形成型・政策提言型に移りつつある。
- 3) 今後の市民活動に必要なのは個々の団体の「専門性」である。
- 4) ロビー活動には信頼性のある情報の取得と基礎知識と事態の分析力、そして人間関係が必要。
- 5) ネットワーキングには個々の団体が自律し多様なまま共存することが前提である。
- 6) 市民活動の拡がりの際には財源獲得が大きな鍵である。

気候フォーラムは「アンブレラ組織」であった。アンブレラとは文字どおり「傘」の意味である。傘の頂点の部分が気候フォーラムであり、その裾野へと各登録個人／団体が所属していたという概念整理が可能である。COP3は確実に非日常であった。主義主張の違う団体が共存していたのだから…。

今後の市民活動を発展させるためにはアンブレラではなくネットワークが形成されていかなければならない。アンブレラとは違って、文字どおりの横のつながり：「連携」をしていくためにはネットワークを作ってはならない。エゴとエゴのぶつかりさえも認めるような連携体制ができていかなくは、やがて利害関係の衝突によって組織は破綻する。したがって先ほども出てきた「地球益」という言葉を借りれば、地球益の視点に立ったネットワークのためには「私は地球のためにこんなことをしている」と堂々と言えなければならないだろう。ネットワークという魅力的な言葉や概念に依存したり、あるいはネットワークに参加していれば全ての問題が解決されたような幻想を抱くことがないよう、とりあえず一人市民運動でもいい、あなたが今何をやるのか、それは何故で何のためなのかを言える豊かな社会土壌を作って行かなくてはならないだろう。一人称で環境問題を語ろう！

# ねとわーく

## ■府民の森体験キャンプ 「こども冒険学校」

- 日時 8月1日(土)～2日(日)1日2日
- 場所 くらんど園地ファミリーキャンプ場(交野市)
- 内容 野外料理にチャレンジしたり、夜の森をハイキングしたり、ジュニアレンジャーになって地球の宝ものを探してみよう。
- 対象 小学4年～中学3年生
- 定員 40名
- 参加費 4,000円
- 申込法 往復はがきで7月1日～15日の期間にお送りください。(消印有効)1葉で2名まで。
- 問い合わせ (財)大阪府農とみどり環境の整備公社ネイチャーイベント係  
〒541-0053 大阪市中央区本

## ■第273回食料環境セミナー 「くらしの中のダイオキシン」

- 日時 6月24日(水)10:00～12:00
- 場所 神戸学生青年センター
- 内容 家庭ごみの分別が燃やすとダイオキシンの発生する塩ビ製品です。日本のごみは4分の3が焼却処分。塩ビの生産量も世界一。どうすれば少しでもダイオキシンの発生を減らすことができるか。愛媛大学農学部環境計測学教室の松田奈明氏とともに、くらしの中のダイオキシンについて学びます。
- 参加費 500円
- 申込法 当日受付
- 問い合わせ (財)神戸学生青年センター  
〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 TEL.078-851-2760

## ■吹田自然観察会 「紫金山公園のキノコ観察」

- 日時 6月28日(日)9:30～12:00
- 集合 吉志郡神社入口
- 場所 紫金山公園(吹田市)
- 内容 梅雨頃の紫金山は、いろいろなキノコが一番たくさん出てくる楽しい季節です。
- 持ち物 弁当、水筒、雨具など
- 参加費 大人300円、子ども200円、1家族500円
- 申込み 下記までお問い合わせ下さい。
- 問い合わせ 吹田自然観察会(高島)  
TEL&FAX.06-877-5249

## ■日本野鳥の会大阪支部探鳥会

- 日時 6月20日(土)9:00～雨天中止
- 場所 鶴見緑地
- 集合 地下鉄鶴見緑地駅改札前
- 担当 旭(TEL.0722-52-1925)

- 日時 6月21日(日)9:00～雨天中止
- 場所 淀川
- 集合 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅北側改札口前
- 担当 橋本(TEL.06-352-0302)

- 日時 7月4日(土)9:00～雨天中止
- 場所 枚岡公園
- 集合 近鉄奈良線枚岡駅 枚岡神社鳥居前
- 担当 村川(TEL.06-722-7428)

- 日時 7月5日(日)9:15～雨天中止
- 場所 鉢ヶ峯
- 集合 泉北高速鉄道星ヶ丘駅センタービル噴水前(難波から30分)
- 担当 清水(TEL.0722-99-1779)

- 参加費 各日とも200円(レクリエーション保険料にあてますので、乳幼児も徴収いたします。)

- 持ち物 いずれも、弁当、水筒、雨具、帽子、手袋、タオル、名札、観察用具、筆記用具など

## 関西ECOMAIL

第44号 1998年6月8日発行

編集 日本環境教育学会 関西支部 世話人会 広報委員会

発行 日本環境教育学会 関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室(鈴木善次研究室)気付

〒582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1

(☎&FAX 0729-78-3381[直通])

第45号は 1998年7月10日発行予定 原稿必着期限7月4日

E-mail: m979344@ikoma.cc.osaka-kyoiku.ac.jp

第44号は日本環境教育学会第9回大会の閉会を待って発行したため、当初予定していた発行日より1月あまり遅れました。ご了解お願いします。